城月雅大 編著
『まちづくり心理学』

名古屋外国語大学出版会、二〇一八年

横山　陽二

『まちづくり心理学』の書評を執筆するにあたり、原稿を三度、視点を変えて読んでみた。一度目は、本書のタイトルにある『まちづくり心理学』というものがどういう考え方を提起していて、またどんな読者を想定すべきなのかを考えながら読んでみた。この著では、執筆者の言葉を借りるなら、広範囲で学際的なテーマである「まちづくり」を「心理学」の視点から解決することを提起した新しい試みがみられる。この考え方を提示している学術的文献も見当たらないそうである。つまり、研究者にとっても、まちづくり実践者にとっても、新しい学問であり、かつまちづくりの効果的なソリューションになる可能性がある分野だと言えよう。どんな読者を想定すべきかについてだが、まずは名古屋外国語大学出版会から出しているため、本学の学生に読んでもらいたい。そして次に読んでもらいたいのは、まちづくり実践者たちである。なぜなら、これからまちづくりに関わりたい方々や、今まちづくりを始めてはみたがうまくいかない方々など、都市よりも地方で少子高齢化に悩む地域における〝実践者〟には貴重なテキストになり得るからだ。

　二度目は、学生の視点で読んでみた。昨今の世の中は、まちづくり関連本で溢れている。しかし、そもそもまちづくりとは何かといった説明や、また世界と日本の都市計画の歴史について丁寧にかつ簡潔に解きほぐしている本は極めて少ない。これからまちづくりを学習する学生たちには、基本的に知っておいてほしいミニマムな教養がこの本には含まれている。そうした基礎的な知識を得るために、まずは一章をよく読んでいただきたい。もちろん、各章についても必ず読んでいただきたい。なぜなら、二、三章は心理学という新しい視点からまちづくりを考察しており、学問的な内容でもあるので学生にはしっかりと頭に入れていただきたいと思う。

　三度目は、まちづくり実践者の視点で読んでみた。私自身もその一人であるため、大変興味深く読ませていただいた。特に五章において紹介されているまちづくりの事例は、経緯から手法、そして事後の検証まで詳細にわたり記述されているため、まちづくり実践者にはとても参考になるはずだ。高知県西土佐中組地区で、城月氏と学生が地域住民と協働して開発を仕掛けて完成させた「ふわふわ豆腐」の事例や、同じく同氏が名古屋外大の立地する日進市の隣に位置する愛知県長久手市で実践してきた「まちなか農縁」事業、そして高知大学の大槻氏が取り組んだ高知県大豊町八畝地区における「地きび焼酎復活プロジェクト」などは、地域活性化の事例として学ぶべき示唆が多く含まれている。また、六章においては、これまでの事例を通して得た知見を基に、まちづくり実践へのエッセンスをわかりやすくまとめている。これらは分かり易い表現で書かれた文章とマトリクスで整理されているため、地域における実践者にも参考になるだろう。そして、まちづくり心理学における重要なキーワードもぜひ覚えていただきたい。「地域への愛着」、「原風景」、「サードプレイス」など、これらのキーワードを使いこなすことができれば、あなたの地域は幸福な場所にできるはずだ。

　マーケティングと広報の実務家出身の教員である私にとって、「愛着」という考え方は、広告・広報業界では「Civic Pride」というヨーロッパ発の概念として日本にすでに紹介されていて馴染みがある。この考え方は、都市空間デザインを専門とする東京理科大学教授である伊藤香織氏がシビックプライド研究会を組織して読売広告社とパートナーを組み、現在も普及・実践している。今回のまちづくり心理学も伊藤氏が提唱する考えに近いため、今後、考え方の整理や差別化が求められるだろう。こうした課題をクリアして、この出版を契機に十年前に四人の研究者でスタートした研究と実践が、さらに多くの研究者の方々や実践者を巻き込みながら、まちづくり心理学が学問としても確立され、かつ一般にも普及させることを期待したい。そのためには、学会はじめ官公庁などへ幅広くまちづくり心理学を提起し、学問への理解者とまちづくり実践者双方を増やしていく必要があるだろう。事例を積み重ねて検証し、更にわかりやすいプログラムに落とし込んで作業手順や手法などをパッケージ化することがまちづくり心理学を主流化することにつながると、筆者は考えている。